



TITLE:

# 反帝國主義者ホブソン - 帝國主義 の經濟學(二) -

AUTHOR(S):

靜田, 均

---

CITATION:

靜田, 均. 反帝國主義者ホブソン - 帝國主義の經濟學(二) -. 經濟論叢  
1954, 74(3): 125-142

ISSUE DATE:

1954-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/132377>

RIGHT:

# 經濟論叢

第七十四卷 第三號

---

反帝國主義者ホブソン……………靜 田 均 (1)

紡・織業の産業革命と女工の結核病……三 島 康 雄 (19)

「抽象的・人間的労働」について……………金 鐘 碩 (41)

日本鐵鋼業の成立と對外投資……………小 野 一 一 郎 (52)  
難 波 平 太 郎

---

〔昭和二十九年九月〕

京都大學經濟學會

# 反帝國主義者ホブソン

——帝國主義の經濟學(二)——

靜 田 均

わたくしは舊稿『帝國主義の經濟學(一)』(『經濟論叢』第七一卷第一號)において、ホブソンの名著『帝國主義論』の第一篇『帝國主義の經濟學』に關し、その大要を略説した。同書はほかに第二篇『帝國主義の政治學』をもつてゐるのであるが、後者については、まだ少しも觸れていない。従つて全貌を描いたとはむろんいえないけれど、それにも拘らず、ホブソンの理論構成の特徴を窺うには、おおむね事足りるであらう。以下わたくしは、必要なかぎりにおいて第二篇『帝國主義の政治學』にも言及しながら、學説史の上から見て比較的重要なと思われる二、三の問題點を拾ひ上げ、若干の補足と考察とを加えてみたい。

わたくしはさきにホブソンの『帝國主義論』をもつて、近代帝國主義の研究に關する最初の包括的な著作であると述べた。それはたしかに一つのエポックを劃したものだといつてよい。

もちろん帝國主義に關する勞作は、ホブソン以前になかつたわけではない。一部の學者は、アメリカの金融評論家

チャールス・A・コナントの『東洋におけるアメリカ合衆國』(G. A. Conant, *The United States in the orient*, 1900)を注目すべき文獻としてあげている。この書物は一九〇〇年の出版であるから、ホブソンの『帝國主義論』より二年はやい。しかもそれは既に發表した論文を集めたものであり、とりわけその中の『帝國主義の經濟的基礎』(*Economic Basis of Imperialism*)と題する論文は一八九八年に發表されたものである。しかし、それだからといって、これをホブソンの直接の源泉であると見做すことは困難である。むしろ逆にコナントこそ、ホブソンに負うていと解されるのであつて、このことは彼が特にホブソンの『近代資本主義の進展』(*The Evolution of modern Capitalism*, 1894)を援用していることよりして明かである。これに反して、ホブソンは幾多の文獻を引用しながら、コナントには一度も言及していないところを見ると、おそらく格別の影響をうけなかつたものと推測してよいであろう。

元來ホブソンはマンチェスター・ガージャンの特派員として南阿に遊び、ブーア戦争をめぐる經濟と政治の野合をまのあたり目撃し、その醜狀に眉をひそめながら、生々しい印象のもとに一種の公憤をもつて、矢つぎばやに一連の勞作をものしたのであつた。一九〇〇年には『南阿戦争』(*The War in South Africa*)を、一九〇一年には『主戰論の心理學』(*The Psychology of Jingoism*)を、そして一九〇二年には『帝國主義論』を公けにしたのである。いまこれを前記コナントの論文集と比較するならば、とうてい同日の談でないことを知るであらう。視野の廣さからいっても、理論構成の緻密さからいっても、ホブソンの方が遙かに立ち優つてゐることは、議論の余地がないほどはっきりしてゐる。

さてホブソンの根本の立場は、過少消費説ないし過剩貯蓄説に屬する。それは彼の全著作を通じて一貫してゐる思想であつて、『帝國主義論』もまた例外をなすものではない。では、ホブソンにそうした過少消費説ないし過剩

貯蓄説を吹き込んだものは誰であつたろうか。それはA・F・マンマリーである。

マンマリーは實業家であつて、學者でもなければ、ジャーナリストでもない。しかし稀に見る透徹した識見の持主であつた。彼は、不況期における資本と勞働の過少雇用が過剰貯蓄に原因することを、堅く信じて疑わなかつた。いうまでもなくこれは、セイ、リカルド等々の正統派經濟學の教義とまさに對蹠的な考へであるが、マンマリーと個人的な交友關係のあつたホブソンは、その強い影響をうけ、大いに共鳴するにいたつた。ホブソンは當時を回想して、『長い間わたくしは、正統派經濟學の武器をもつて彼の議論を打ち破ろうと努力した。しかしついに彼はわたくしを説き伏せ、わたくしは彼といつしよに「産業の生理學」と名づける一書において、過剰貯蓄説を仕上げることとなつた。この書物は一八八九年に出版された。それはわたくしの異端者的な經歷の公然たる第一歩であつた』(J. A. Hobson, *Confessions of an Economic Heretic*, 1938, p. 30) 云。

經濟學者としてのホブソンは、みづから告白するとおり、正統派經濟學に對してむしろ叛旗をひるがえす異端者であつた。また反帝國主義者として國家社會主義に好意を寄せている面もたしかに窺われる。が、それにも拘らず、社會主義に徹するわけではなく、むしろ自由主義的な社會改良主義者に終始した、といつてよい。

ホブソンは彼の代表的勞作である『近代資本主義の進展』(*The Evolution of Modern Capitalism*, 1894)を書く數年前、すでにマルクスの『資本論』を英譯で讀んでいた。しかし、それを高く評價することはできなかった。勞働價值説のごときは『まちがつた努力』としか映じなかつた。部分的にヘーゲル流の辨證法を弄し、神祕主義を加味した空虚な逆説にすぎない、とさえ極言している(*Confessions*, p. 35)。

ホブソンの經濟的帝國主義の理論において樞軸をなすものは、『剰余價值』であるが、内容的にはマルクスの『剰

余價值』概念と全くその選を異にするのであつて、兩者の懸隔はきわめて明瞭である(J. A. Hobson, *The Economics of Distribution*, 1900; *The Industrial System*, 1927)。ホブソンによると、剰余價值はマルクスのいうように勞働力のみが生み出すものではない。經濟社會において個々の土地および資本の所有者が有する『取引能力』(*Bargaining power*)の差等から發生する。換言すれば、市場においてある人々または階級が他の人々または階級に對して經濟的に優越している結果にはかならぬのであつて、ホブソンはそれを『強いられた利得』(*forced gain*)という名稱で呼んでいるのだが、まさにその中にこそ經濟的禍害の源があるのであり、帝國主義および戰爭という毒草の花がひらくのも、決して偶然ではない、と主張する。

帝國主義の經濟的根元は過少消費、過剩貯蓄、剰余價值、強いられた利得、誤れる分配にある。こういうのがホブソンの固有の考えてあつてみれば、これを裏返しにすると、帝國主義はかかる根元から派生した技業にすぎない、ということにならう。そうである以上、根元に斧鉞を加えないかぎり、帝國主義を打倒しえないことは、ほとんど自明の理に近い。

## 二

ホブソンは『政治的手段もしくは政策』としての帝國主義の『矯正手段』として、『社會改良』を提案している。ここに社會改良というのは、全く經濟的意味に解さるべきであり、『國民のため健全な私的および公共的消費水準を高め、その結果、國民の生活をしてその最高の生産水準にまで達することをえせしめる』(第一篇第六章)ことを目標とするものにはかならぬ。

そこで問題は、こうした社會改良を實現すべき具體的方策は何かということになるわけであるが、ホブソンは、さしあたりつぎの二つのものをあげている。すなわち勞働組合主義と國家社會主義がそれだ。前者は私的協力もしくは立法上および行政上の統治に對する政治的壓迫によつて、國民所得のうち賃銀・扶助料・災害補償などの形態をとつて勞働者に歸屬する部分を増加するし、後者は財産および所得に課税して所得の不勞部分を國庫に納入せしめ、『個々の生産者には、最良の方法をもつて彼等の經濟的精力を適用せしめるよう誘引するに必要な所得を、また私的企業者には獨占を生ずることなく、しかも政府が引受ける必要または能力を有しないような事業を委託して、産業社會の密接な、かつ實質的に協力的な業務から生ずるところの「社會價值」の増大する分前を、全社會の直接の使用に供することを目的とする』（第一篇第六章）。ところでこれら二つの方途は、ホブソンによれば、本質的に矛盾するものではなくて、むしろ補足しあうものである。彼は書いてゐる、『勞働組合主義および國家社會主義は、所得のうちさもなければ過剩貯蓄となつたであろうような部分を、勞働階級もしくは一般歳出に轉ずることによつて、國內消費の一般的標準を高め、かつ海外市場に對する壓迫を軽減するかぎりにおいて、帝國主義に對して反抗する補足的な勢力と見做してよいであらう』（第一篇第六章）。

以上の引用が示すように、ホブソンは勞働組合ならびに國家社會主義（もつとも後者の概念はあまり明瞭ではない）によつて、いいかえると、賃銀の引上げや政府の財政政策によつて、帝國主義を減殺し、または中和する可能性を考えていることが察知される。ホブソンが社會自由主義者などと呼ばれるゆえんであり、われわれは穩健な改良主義者の風貌を想像に描くことができよう。問題はその具體的な現實性にかかわるわけだが、彼は他方において、主體的條件を計算にいれるとき、必ずしも樂觀を許さぬことに注意を怠つてはいない。『帝國主義の傾向は、勞働組

合主義を粉碎し、國家社會主義に「戯むれ」または寄生して喰い物にすることがある』（第一篇第六章）。

かようなわけでホブソンは、國內における勞働組合や社會主義的政黨の成長が帝國主義の反對勢力として有する意義を強調するに拘らず、それに全幅の信頼を寄せることはなかつた。他方、彼は民主主義の確立が帝國主義的勢力を驅逐しうることを指摘し、政治における民主主義の擴充を要望してやまない。『國民の内部における帝國主義者の勢力が、國家機關を運用することによつて、彼らの私利私得のために國民的資源を使用する權力は、ただ純粹な民主主義の確立、すなわち人民による、人民のための、人民が眞實の監督權を行使する代表者を通しての公の政策の指導によつてのみ覆すことができる。わが國民もしくは他のいずれかの國民がこのような民主主義に對してすでに充分な能力があるか否かは、全くもつて大いに疑わしい事柄だが、一國民の對外政策が「民衆の意思にひろく基礎をおく」までは、またそうしないかぎりには、救済の望みはほとんどないように見える』（第二篇第七章）。

では、政治および經濟を通じて民主主義の擴充をはかることは、いかにして可能であるか。これに對するホブソンの解答は、結局のところ教育に歸着するかのようである。いわく、『民族が自己の權力に對するこの危險な僭奪をふりはらい、民族的資源を民族的利益のために使用する能力は、民主主義を政治的および經濟的現實となすところの民族的知性と民族的意志の教育に依存している』（同上）。

しかし現實の資本主義社會における教化機關なるものが、帝國主義者によつて經濟的に支えられており、教化方針そのものが彼等の意圖によつて左右されるかぎり、一種のゆがめられた偏向に陥る傾向の強いことは、まさしくホブソンの痛烈な批判を浴びせているところである（第二篇第三章）。果して然りとすれば、教育の效果に大きな期待をかけぬことは、ホブソン自身誰よりもよく認めている筈だといわねばならぬ。



いずれにせよ、問題はナショナルな觀點からばかりでなく、インターナショナルな觀點からも考察されなければならぬであらう。まず帝國主義は植民地や後進國に對していかなる反作用を及ぼすか、あるいは後者における反對勢力の擡頭が、帝國主義に對する阻止的要因としてどれだけの力をもつか、顧みられねばなるまい。ホブソンは書いてゐる、『侵略的帝國主義は、併合するにはあまりに異質的であり、永久に壓伏するには、あまりに結束のきたい國民の間に、ナショナルリズムを人爲的に刺戟するものである』。『侵略的帝國主義は、相競争する諸帝國間に敵意を助長することによつて、國際主義への動きを打ち挫ぐばかりではない。それが弱小いしは劣等人種の自由と生存とに對して加える攻撃は、彼らを刺戟して、これに對應する過度の民族的自覺を喚び起す』（序章『民族主義と帝國主義』）。この洞察はたしかに正しい。しかしそれにも拘らずホブソンが、植民地や後進國における民族主義的解放運動や反帝國主義的鬭争に對して、別段の注意と期待をかけていないのは何ゆゑであらうか。

第一次大戦の最中にホブソンは『國際政府へ』と題する一書をあらわした（J. A. Hobson, *Towards International Government*, 1915）。國際政府はもちろん帝國主義のアンチテーゼを意味するが、その中でホブソンはもはや『公衆の消費力の増進』を帝國主義の對策として語つてはいない。彼の提唱したのは國際委員會または國際連盟であり、こうした新しい機構では、これまで國際的事件において見られた合縱連衡という古い制度に代つてデモクラシーが支配する、とホブソンは考へる。

『帝國主義論』を書いた當時のホブソンは、『度を越した餘りにも簡單すぎる歴史の經濟的決定論』に傾いてゐたようだが、後になるほど政治學や倫理學に深い關心と理解をもち、いわば社會學者的な風格を加へるようになり、『經濟生活において國家および政治力の演ずる役割がますます増大しつつある』ことに強く心ひかれるように

なつた。かくてついに改良された資本主義と國際政府の實現の可能性を信するにいたつたものの如くである。(Crosby)

(Crosby)

### 三

ホブソンは新しい帝國主義と古い帝國主義とを對照して、兩者の相違點を明かにしている。すなわち彼は、近代帝國主義の歴史的特徴として、(1)かつてのように單一の成長しつつある帝國の野望ではなく、互いに競争を演じつつある複數の國家の理論および實踐であつて、それらの諸國家は政治的膨脹と經濟的利益を追求するものであること、(2)その追求する經濟的利益は、商業上のそれよりも金融上ないし投資上のそれがより重要な意義をもつに至つたことを指摘している。

たしかに國際金融ないし海外投資と帝國主義との內的關連を強調するのは、ホブソンに固有の注目すべき見解である。しかし、そうかといつて、彼は外國貿易の意義を輕視し、または看却しているわけではない。過剩商品の販賣市場と過剩資本の投下領域とは、二つながら重要視されているのである。

つぎに誤解のないよう一言しておきたいのは、『帝國主義の原動力はもつぱら金融的なものだけにかぎられるわけではない』ということである。ホブソンによれば金融は版圖擴張の發動機といわば調節器であつて、エネルギーを加減し、その作用を調節するにすぎぬ。發動機の燃料でもなければ、直接の動力を生み出すものでもない。彼はいう、『金融的インテレストは帝國主義を動かすに必要な集中力と明敏な打算力をもつてゐる。野心滿々たる政治家や國境警備の軍人や熱狂的な宣教師や猪突的な貿易業者は、版圖擴張の手段をはのめかすどころか、自分でそれ

に手をつけたり、また新たな進出は刻下の急務であると愛國的な世論に訴えるかもしれない。しかし最後の決定は、かかつて金融的な勢力にある』（第一篇第四章）と。あるいはこうも書いている。いわく、『政治家や軍人や博愛家や貿易業者などの源泉から生ずる版圖擴張熱は強烈であり、純粹ではあつても、不規則であり、盲目的である。金融はこれらの人々の生み出す愛國的動力を巧みに操縦する』（同上）。

以上の引用が端的に示すように、近代の帝國主義においては、商業的利益國よりも金融的な投資的利益國がより優越的な地位をしめることをホブソンは強調するのであるが、同時にそれは帝國主義的行動を左右する最後の鍵を握るものが誰であるかを明確に指摘するものでもある。かくてホブソンによると、『金融資本家の政策が必ず戦争を促すとは限らない』のであつて、戦争が投機の終局的かつ根本的基礎であるところの産業の實質的組織に、あまりに甚大な、あまりに永久的な損害を与える場合には、彼等の勢力は平和の側に投ぜられ、危機は回避される。ホブソンはかかる場合の例證として、ベネゼラをめぐる英米の紛争をあげている。

さて海外投資と帝國主義との關連を強調するホブソンの見解が、後代の理論家に、わけてもレーニンに大きな影響を与えたことは、周知のとおりであるが、かかる見解に關しては、なお否定的な批判を加える論者もないではない。外交史家ランガーのごとき、さしずめその一人であらう (W. L. Langer, *A Critique of Imperialism. Foreign Affairs*, Vol. 14 No. 1, 1935)。

ランガーによると、イギリスの海外投資は一八七五年以前において、すてにかなりの巨額にのぼつていた。しかるにこの時期は、イギリスで反帝國主義の氣運が頂點に達した時期である。一八七五年から一八九五年にかけ、帝國主義の風潮が再びたかまつたけれども、この期間は海外投資がはつきり減退したことによつて特徴づけられてい

る。かくて資本輸出は、第一次大戰前において大規模に行われたとはいへ、イギリスはこの期間すてに南アフリカの成果に幻滅を感じ、帝國主義に對して懷疑的になつていた。同様のことはアメリカ合衆國についてもいうことができる。モンロー・ドクトリンの宣言がアメリカの帝國主義的行動を意味するとした場合、その條件たるべき資本輸出は果して存するであらうか。アメリカとスペインとの戰爭は、帝國主義のエピソードだとしよう。しかしその當時のアメリカは、資本を輸出するよりむしろ輸入する債務國であつた。ロシアについて見ても、帝國主義のさかんな時期は、外國に金を貸すどころか、むしろ逆に外國から金を借りる時期にあたつてゐる。

そこでランガーはいう、『資本の輸出は、領土の擴張とはとんど直接の關係がない』。フランスは第一次大戰前、輸出するだけの多量の資本をもつていた。しかし植民地を確保してからは、資本を植民地に移出するようなことはしなかつた。フランスの輸出した資本の大部分はロシア、ルーマニア、スペイン、ポルトガル、エジプトおよびオットマン帝國に向けられたのであつて、一九〇二年の調査によると、植民地に投下されたのは、わずかにその一〇パーセントにすらみたなかつた。

一九一三年にイギリスは、自己の植民地や他の諸國よりも多くの資金をアメリカ合衆國に投下してゐた。アメリカ合衆國はまたイギリスよりも多くの資金をカナダの産業開發に投下した。第一次大戰が終ると、アメリカ合衆國は大きな債權國に轉換したが、對外投資の四三パーセントはラテン・アメリカであり、二七パーセントがカナダおよびニュウファウンドランド、二二パーセントが歐洲各國であつた。しかも植民地に投下した金額は、微々たるものであつた。

ドイツを例にとると、一九一四年に約二五〇億マルクを國外に投下した。そのうちわずかに三パーセントがアジ

アとアフリカに投下され、そのうちの少部分が植民地に關するにすぎない。第一次大戰前のロシアは巨大なる帝國主義國であつたが、極東經營のためにフランスから借金せねばならなかつた。日本やイタリーも資本の乏しい國である。これらの諸國を膨脹に驅りたてたものが何であらうと、資本輸出の必要ではありえない。

以上のような駁論は、ひとりランガーだけに過ぎるわけではなく、他にも同調者があるし、またホブソンの追隨者も少くないから、ホブソンに對してのみ向けられた批判と解することは、適切ではないであらう。それはなお立ちいつた吟味にあたひする重要な論點であるにちがいない。しかしその當否に觸れることは別の機會にゆづるとして、ここでさしあたり問題としたのは、右に述べたホブソンの見解が晩年まで一貫して固持されたか、それとも中道で放棄され、または修正を加えられたか、という點である。この問題に關しウィンズローは、後にいたつてホブソンの考に重大な變化が起つたと主張する (E. M. Winslow, *The Pattern of Imperialism*, 1938 p. 102)。そしてこの解釋は大いに理由があるといつてよい。論より證據、『帝國主義論』の公刊後わずか九年、すなわち第一次大戰の直前に出た『投資の經濟的説明』 (*An Economic Interpretation of Investment*, 1911) を見よ。ひとはその内容のあまり甚だしい懸隔におそらく一驚を喫するであらう。

ホブソンはいう、『中國に對する列強の大規模な共同投資は、極東における平和の最も確實な基礎を提供するであらう。經濟以外のいろいろな動因が、金融的ならびに政治的な西ヨーロッパの支配を極東から根絶し、かつ分裂主義的文明に逆轉せんとする組織的努力を齎すであらうけれども、明白に政治的にして民族主義的な觀點は弱化したつちあり、また政治的支配をきわめて僅かしか直接には想定しないところの經濟的國際主義に、すなわち國際的資産に對してよき保證を提供するに必要と認められる事實上最低限度のものに道を譲りつつある。』『アメリカ合衆國

が海外投資國に正面から仲間入りすることは、おそらくこの傾向を強めるであろう。なぜなら、アメリカ帝國主義における初期の経験は、儲かるものでもないことを證明した筈だからである。またたとえアメリカの貿易と資本に對して海外の地域を防止せんがために、政府の壓力が大いに加えられるとしても、アメリカ合衆國が領土の擴大という、より以上の企劃に乗り出すことはありそうもないからである。』『アメリカ合衆國の海外投資政策は經濟的なもので、門戸開放を高唱するにすぎず、多かれ少かれ協調的だから、明かに平和的な性格をもつものであり、後進國によき秩序と發展とを増進せしめそうであるし、列強の嫉視を緩和しそうである。』ホブソンはドル外交を實にこのように評價しているのである。

要するにホブソンは、この新しい書物の中で、帝國主義が從來の性格を変えつつあること、換言すれば、政治的な民族主義的な色彩は弱化し、經濟的な國際主義に道を譲りつつあること、しかもこうした傾向はアメリカ合衆國が海外投資國として本格的に仲間入りすることによつて一層強められるであろうこと、國際的な共同投資は債權國相互の關係を親密ならしめるから、平和と安全のよりよき保障たりうること、世界における最も重要な投資地域としての南アメリカおよび極東における近狀が最も雄辯にそれを語っていること等々を力説している。すなわち彼が強調するのは、海外投資のコスモポリタンの性格であり、國際投資の平和的性質である。

#### 四

ホブソンの『帝國主義論』の中で最も興味をひく箇所の一つは、新舊帝國主義の比較である。それはひつきようにするに古代帝國主義と近代帝國主義との異同の問題にはかならない。兩者の相違性に關するホブソンの見解につい

ては、すでに一應の考察を加えた。こんどは兩者の類似性について彼がどんな推論を下しているかを見ることにしよう。

ホブソンによると、新舊帝國主義の類似性の第一は、動機の點にかかつてゐる。それは經濟的なものであるという點で全く共通である。ところで古い帝國主義の主要な動機は二つあげられる。財實に對する熱望と奴隸賣買がそれだ。

前者についてホブソンはいう、『金および銀、ダイヤモンド、ルビー、眞珠およびその他の寶石は、幸運や詐欺や武力による一度きりの危険な冒險で一舉に富者になれるところの、運搬することができ、しかも永續性のある富の最も壓縮された形態であるが、これらのものは古きティールおよびカルタゴ時代から私的および國民的踏査の主潮を指導し、そして有色人種に對する白人支配の礎を築いてきた』(第二篇第四章)。貴金屬について、錫や銅が山樹貿易に附け加えられた。しかるに近代の機械經濟は、石炭や鐵鑛を文明諸國民に對する財實たるの地位にまで引き上げた。原料源泉の獲保こそ、今日における資本の最も切實な要請である、といつてよい。しかも金にいたつては、近代帝國主義に對する引力の劇的中心として、相變らず獨自の地位を保つてゐる。

つぎに帝國主義の第二の動機について、ホブソンはいう、『初期の帝國的膨脹の形態は、外國の永久的占領および統治よりも、むしろ征服國に送らるべき奴隸勞働の大量供給の獲得にむけられた。ギリシャ諸國家およびローマの初期の帝國主義は、概してこの同じ動因によつて支配されていた。ギリシャ人およびローマ人は、おうおう彼等が征服した野蠻人の間に大きい永久的な植民地をつくらなかつたが、しかし秩序と貢納の支拂を確保するに足る程度の軍事上および行政上の支配を維持することに満足して、その勞働を利用するため夥しい數の奴隸を彼等の國に

送つた』（第二篇第四章）。すなわちギリシヤ人はこれらの奴隷を海運、鑛山、工業などの強制労働に服せしめ、またローマ人は農園における強制労働に使役した。

ところでホブソンによると、近代帝國主義も劣等人種に關する關係では、右の古代帝國主義とほとんど異るところはない。たださすがにより人道的な他の動因が加つただけ、露骨な經濟的貪慾の支配をいくらか和けているにすぎぬ。つまり、かつての奴隷という法律的身分が賃銀労働者のそれに場席をゆずつた。そして劣等人種の労働者は、白人の利潤のため白人の管理のもとに土着の資源開發に雇用されている。熱帯の産物に對する需要の絶えざる増加傾向と豊富な天然資源および低廉な労働力を追求してやまぬ熱情とが、近代の工業諸國を資本輸出にまで驅りたてるのだ。

以上これを要するに、帝國主義は新舊を問わず、ともに富と労働力に對する強烈な欲求を最も主要な推進力とする點において共通であり、そのかぎりて密接な類似性をもつというのが、ホブソンの主張の骨子であつて、われわれはそこに彼一流の解釋を見出すことができる。それはまことに帝國主義の經濟學にふさわしい説明の仕方だ、といえよう。

## 五

さて新舊帝國主義の類似性の第二點は、ホブソンによると、帝國主義の寄生性・類廢性とその結果たる自壞作用である。そしてこの着想こそ、レーニンに有力な示唆を與えたところのものにはかならぬ。

ホブソンは古い帝國主義の典型としてローマ帝國の建設をあげ、かつその衰亡について語つてゐる。それによる



と、舊い帝國主義を崩壞に導いた要因は二つあつた。その一つは植民地や屬領に對する經濟的搾取に根ざした寄生主義であり、もう一つは從屬民族をもつて編成した傭兵の制度である。

ホブソンによれば、末期におけるローマ帝國の顯著な特徴は、金融貴族の擡頭である。この階級は鋭くて圖太い連中の集りて、國家の要職を占める政界の親分や軍事的冒險者を手先とし、また地方領土における高利貸や收稅吏や警察の首長を手先としたばかりでなく、植民地歸りの役人や金持によつて絶えず補充されていた。地方領土から來る役人の私的掠奪、公の貢物、利息および官職に伴う収入は、莫大な金額に上り、彼等の奢侈と都市の繁榮を培つた。

一方、農村では農民が軍隊生活に引き入れられ、その後釜に農奴の勞働が置き換えられた結果、ローマの農民は都市に入つて最下層の生活を余儀なくされ、公の救恤にすがる境涯に陥ることとなつた。植民地からは、ますます多くの傭兵がやつてきて、本國の軍隊にとつてかわつた。ところで、ギボンの指摘したように、寄生的な都市生活は、ローマ人の體位をそこね、婚姻數の減少は人口の減少を招くにいたり、ついにますますゴールおよびドイツから、粗野な活力をもつた人々の移住を仰ぐことによつて、補いをつけるほかになつた。

『ローマの金融界の利益と結んで』とホブソンは説く、『國家に對して陰謀を企てる有力な地方總督プロコンスルの政治的野心から生ずる危險は、すでに共和政の末期から現われていたが、地方領土を保持すべき強力な傭兵軍を維持する必要が、右の危險を絶えず高めた。時が進むにつれて、この金融寡頭制は世襲貴族制となり、文武の勤務から退いて、ますますお雇ひ外人に依存した。みづから奢侈と怠惰によつてそこなわれ、苦役と放縱の混合でローマの民衆を墮落させることによつて、彼等は國家を著しく弱體化させ、收奪した帝國内における力の大貯藏庫を支配し管理する。

に必要な肉體のおよび道德的活力を破壊した』(第二篇第七章)。かくしてローマ帝國は衰亡の一途を辿つたのである。だが、近代の帝國主義といえども、この古い先例と重要な點において何ら異なるところはない。

ホブソンは『帝國主義論』の第二篇『帝國主義の政治學』の中で、ヨーロッパ連邦の可能性すなわち先進工業諸國のアジアおよびアフリカへの經濟的寄生の可能性を論じたのち、『これらの從者たちは、もはや農業や製造業のごとき重要産業に従事することなく、新しい金融貴族政治の支配のもとに、個人的なサービスもしくは輕微な産業上の仕事の遂行のために維持されるのである。このような説を考慮にあたいしないとして斥ける人々は、今日すでにこういう狀態に陥つてゐる南イングランド地方の經濟的および社會的狀態を調べ、そして金融業者・投資者ならびに政界および財界の役人や役員たちからなる同様のグループの經濟的支配に中國を屈服させることによつて、このような制度の大擴張が實現可能となるであらうことを反省するがよい』(第二篇第七章)、と警告を發してゐる。もちろん、これは將來に對する見透しであつて、斷定的なものとはいへないけれども、しかもし中國が強力な抵抗を發揮することができないとすれば、そうした結末に到達する公算が多いことはたしかだ、というのである。

つぎに傭兵制度について見よう。ホブソンによると、新しい帝國主義は主として熱帯および亞熱帶地方に關係したのであり、そこには多數の『劣等人類』が白人の支配下におかれてゐる。より低廉な、より多數の、よりよく同化された戰鬥員を現地で調達することができるならば、大英帝國の攻防戰にイギリス人のみをあたらせる必要は存しない。安價な土着民を傭兵として利用することは、イギリスの限りある兵員をできるだけ節約し、大部分を本土防衛にあてることを可能ならしめる。『帝國主義の盲目性の最も奇異な徴候の一つは』とホブソンは書いてゐる。

『イギリス、フランスおよびその他の帝國的諸國民が、この危險な依存に乗り出した向う見ずな無關心にある。イ

ギリスは最も甚だしかつた。われわれがインド帝國を獲得した戦鬭の多くは、土着民の多くによつて戦われた。インドにおいては、後年のエジプトにおけるように、大常備軍がイギリスの指揮官のもとにおかれた。わがアフリカの領土と關係ある戦鬭は、南部地方を除けば、ほとんどすべて土着民によつてわが國のために遂行されたのである』(第二篇第一章)。ホブソンはさらに語氣を強めていう、『軍國主義のこの方式は、最初は比較的やすあがりであり、容易であるが、イギリスからの支配が次第に微弱になることを意味する。それは本國人口に對する軍國主義の負擔を軽減するけれども、戦争の危険を増大する。その戦争は、それがイギリス人の生命に關係する度合が少なければ少いほど、それだけ頻繁となり、また野蠻となる』(同上)。『帝國主義の現在の傾向は明かにこの方向に向いつつあり、その反動として西洋諸國の墮落と西洋文明崩壞の可能性とを含んでいる』(同上)。

さて以上に見たようなホブソンの所論は、二重の意味においてわれわれの注意を喚起するよう思われる。第一、レーニンは帝國主義を資本主義の最後の段階と規定し、かかるものとしての帝國主義と古代帝國主義との類似性を追及することをナンセンスにすぎないと酷評しながらも、帝國主義の寄生性と頹廢性を強調する段になると、ホブソンの所論におおむね同感の意を表し、多くの示唆を酌みとつていうこと。われわれはそこにホブソンのレーニンへの影響をまざまざと看取することができる。第二、ホブソンのヨーロッパ連邦に關する所論は、のちにカウツキーが提唱した超帝國主義論と一脈相通するものを含んでいる。そのかぎりにおいてホブソンは、カウツキーの先驅をなしたといえるのではなからうか。現にホブソンは一九三〇年に公にした『合理化と失業』(Rationalisation and Unemployment, p. 116) の中で、『國際帝國主義』(Imperialism)の脅威に言及し、アジアやアフリカのような後進國における未開發資源と勞働に對する先進工業諸國の共同搾取の可能性について語つてゐるほどである。

最後に指摘しておきたいのは、ホブソンが帝國主義をば民族の體内に潜む本能的衝動の發作であるかのように説き、歴史の各時代を貫く不變的なものの存在を結論づけているということである。それを端的に語る一節を引用しよう。『帝國主義は民族生活の墮落した選擇であつて、動物的生存競争の初期の世紀から民族の中に生き残つてゐる量的獲得慾と強制的支配慾に訴へるところの自己の利益を求める諸勢力によつて押しつけられるものである』（第二篇第七章）。これはホブソンの『帝國主義論』の結末を飾る一節であるが、われわれのうける印象は、帝國主義の經濟學的説明ではなくて、むしろ社會學的説明だということである。それは、帝國主義をもつて民族の無目的な膨脹慾に還元するところの、後に現われたシュンペーターの社會學的基础づけと一脈相通するものを含んでいるようにさえ見える。しかし、帝國主義は過去の因子の單なる隔生遺傳であり、資本主義の成熟とともに減衰する運命にあると主張するシュンペーターの所論と符合するものではない。

ホブソンによれば、帝國主義は『すべての繁榮せる國家の陥りやすい罪惡であり、それに對する刑罰は自然の秩序において變更されえない。』『あまねく自然界を通じて作用し、寄生者を萎縮・衰頹、そして究極的な死滅に運命づけるところの法則は、個々の有機體と同様に民族においても免れないのである』（第二篇第七章）。換言すれば、帝國主義は自己の矛盾の重壓によつて没落する不可避的運命にあるわけなのであつて、それはひつきよう自壞作用をもたらしというにあるらしい。だが、現實の事態は、帝國主義を打倒する何らか積極的な契機を孕まねてあろうか。さらに没落した帝國主義の廢墟の上に築かれる新しい社會は、いかなる構成をもつか。またその擔い手は誰か。およそこれらの點に關して、ホブソンはそもそもの展望を抱いていたのであろうか。もし公共當局による經濟の計畫化と國際機構による國民的對立の調整を祈念するに止まつたとすれば、彼はあくまで幸福なオプティミストであつたといわねばなるまい。